

ビザンツ帝国

今回学ぶこと

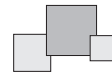
ビザンツ帝国は、キリスト教を国教としたローマ帝国。古代ギリシア文化を遺産とし、都市（ポリス）文化が盛んな社会だった。4世紀初頭に首都コンスタンティノープルを造営、以後「東ローマ帝国」とも呼ばれた。西ローマ帝国滅亡（476年）後、6世紀にユスティニアヌス帝（在位 527～565年）が、西帝国の領土の大半を再征服。また『ローマ法大全』を後世に残して、ヨーロッパ世界の法律の手本とし、近代日本の法律にも影響を与えた。キリスト教を保護して、その信仰と結びついた「慈善」活動が活発化、ヨーロッパ文明に大きな影響を及ぼした。

調べておこう・覚えておこう

- ビザンツ帝国の版図、帝都コンスタンティノープルの場所と見事な景観を知ろう。
- キリスト教社会の誕生と、皇帝ユスティニアヌスと皇后テオドラの事績について学ぼう。
- キリスト教を基礎にしながら、自由でエネルギッシュな社会だったビザンツ帝国の歴史について考えてみよう。

コンスタンティノープルの誕生

皇帝コンスタンティヌス（在位 306～337年）は、ササン朝ペルシアと戦う必要から、ローマ帝国の首都を東に移し、コンスタンティノープルを建設した。またキリスト教を容認した結果、教会や修道院が多く建てられるようになった。コンスタンティノープルの町は、帝国の都として、東西南北、あらゆる地域から来訪者があった。古代のローマ帝国は、元老院を中心として、都市ローマの貴族層が、地方社会を軍事的にも経済的にも支配する社会だったが、ビザンツ帝国は、広く有能な若者が活躍する、自由でエネルギッシュな社会だった。



キリスト教会の展開

新しくキリスト教を国教としたローマ帝国が、ビザンツ帝国だった。この帝国は、コンスタンティノープルを帝都として、キリスト教を国教として（392年以降）、1100年間にわたって東地中海世界に君臨した。ただ、広大な帝国だったので、キリスト教の信仰もまちまちで、皇帝はその統合に苦勞した。6世紀の皇帝ユスティニアヌス（在位527～565年）は、信仰の統一、帝国の拡大に努めて、西ローマ帝国だった地域の再征服活動を行った。ローマ法大全を編纂、後の世界に大きな影響を及ぼした。キリスト教の信仰は、8～9世紀の聖像破壊運動を経て、教会の分裂をもたらした。

ユスティニアヌス帝と皇妃テオドラ

ビザンツ帝国は、ギリシア語を公用語（国際語）とし、古代ギリシア文化を引き継ぐ社会だった。そのことは、聖ソフィア聖堂を寄進し、シナイ山に聖エカテリニ修道院を建立した皇帝ユスティニアヌスの事業に現れている。それは、ギリシアの都市文化にもとづく個人による寄進（慈善）だった。なお、ユスティニアヌスと皇后テオドラは、身分の低い階層の出身だった。ビザンツ帝国は、身分によらず、才覚によって活躍できる、自由でエネルギー的な社会だった。ユスティニアヌスの活動は、ビザンツ帝国（キリスト教ローマ帝国）の最盛期を象徴している。

①法典編纂

編纂された法典は『ローマ法大全』と呼ばれる。これは、近代ヨーロッパの法典の模範となり、近代日本の法律の祖型ともなった。

②キリスト教の保護

異端問題があり、正統信仰の中身を規定し、聖ソフィア聖堂を再建して、国家の礎とした。

③再征服活動

476年に西ローマ帝国が滅亡し、支配が及んでいなかったイタリア、北アフリカ地域を再征服した。派遣された軍団は、イベリア半島（現在のスペイン）南部まで再征服した。これによって、ユスティニアヌスは、古代ローマ帝国の威光を取り戻した。